

論文題目 : 日本の医薬品企業の国際化に関する研究
氏名 : 中井亨

論文要旨

本研究の目的は、日本の医薬品企業の国際化を詳細に分析することで、医薬品企業の実際のマネジメントの場面において、国際化を検討する際の着眼点ならびに国際化を推進する際の留意点を明らかにすることである。本研究では、データに基づく仮説検証型の定量的研究ならびに公開情報に基づく事例研究を行う。

第2章では、医薬品産業の概要と世界の中での位置づけを概観した。このような中、日本の医薬品産業が取り組まなければならない課題については、医薬品産業の将来展望に関する先行研究を概観すると、新薬の創出と市場を海外に拡大することだといえるが、日本の医薬品企業にとっての国際化とは、単に海外市場を獲得することだけを意味するのではなく、新しい開発パイプラインあるいは技術基盤の獲得を通じた研究開発力の強化であり、国際化を進めることによる新しい資源や能力の獲得が企業の競争力の向上につながるということがわかった。すなわちここでの発見事項は、医薬品企業にとっての国際化の進展とは、研究開発力の向上を目指すものであり、国際化が進めば進むほど、その企業の新薬創出力は向上するという相互関連性を見出したところにある。

第3章では、医薬品企業の国際化と財務パフォーマンスとシステムティックリスク与える影響を知るために実証研究を行った。研究開発支出と将来の収益発現のタイミングは先行研究で示された期間よりもさらに長い、超長期となり、具体的には18年かかることがわかった。医薬品産業においてモダリティの多様化など創薬環境が大きく変わりつつある中、自社への研究開発への投資は、企業買収や他社研究開発品の導入を通じた、特許権、のれん、および仕掛研究開発費といった無形固定資産に計上されるのであるが、医薬品企業の投資対象の多くは海外企業である。研究開発の不確実性と事業の国際化の不確実性という2つの不確実な要素が要因となって、超長期かかっていると解釈できる。

第4章では、日本の主要製薬企業2社を取り上げ、多国籍企業のダイナミックケイパビリティや経営者（トップマネジメント）の役割に焦点が当てて、事例研究とインタビューによる定性的な分析を試みた。事例分析とインタビューを通じて、両社とも、経営トップが外部環境の機会や脅威を十分に理解し、自社保有の資源をまとめるとともに、自社にない資源へのアクセスを獲得する活動を超長期間にわたり積極的に行っていることがわかった。

第5章では、本研究の発見事項と学術的貢献、および実業へのインプリケーションについて述べられている。